



— 同友会大学 —

ガンディーによる身の丈の経済論 ～共生の道を目指して～

【報告者】

香川大学法学部教授 石井 一也 氏

はじめに

18世紀半ばのイギリス産業革命以来、人類は激しい勢いで経済発展を遂げ、大量生産・大量消費の時代になりました。それによって私たちは未曾有の物質的な豊かさを手に入れましたが、同時に地球上の資源を大量に消費し、環境を破壊、そして多くの生物種を絶滅に追いやるようになりました。その流れは、21世紀に入り、ますます深刻になってきているようにみえます。本日は、こうした問題意識に基づいて、マハトマ・ガンディーの経済論の概要とグローバル時代におけるその意義を、「自立共生」の概念を軸として考えたいと思います。

①自立共生とは

イヴァン・イリイチは、「自立共生」(conviviality)を「各人が自立的でありながら、他者を尊重し、相互に助け合う倫理」と定義しました。そこには「喜びに溢れた節制と人を解放する禁欲の価値」が含まれています。

私たちは、節制や禁欲というと、どうしても窮屈なものと

して受け止めがちですが、イリイチは、そこに喜びが伴っていると言うのです。

日本では、田辺明生氏が、「地球大の自立共生」という考えを示しています。その際、田辺氏が依拠しているのは、社会学者の大澤真幸氏の「人間の社会性」の概念です。

大澤氏によれば、人間は、獲得した獲物をその場で食べてしまうのではなく、一定の場所に持ち帰り、複数の個体たちのあいだで共食するといいます。この時、食べてしまいたいという欲求を抑えて、仲間たちと一緒にそれを食べることによって得られる欲求(二段高い欲求)のために、一次的な欲求(カッコ)に入れるということです。そこに「人間の社会性」があるというのが大澤氏の議論です。

田辺氏は、こうした「人間の社会性」という概念を受けて、より深い喜びを生む関係性を構築するという、二次的な(より高次の)欲望を前提とする地球大の自立共生の可能性を追求しているというのです。

田辺氏の議論は、どちらか

という空間軸を拡げて自立共生を考えていこうというものです。私は、さらに時間軸を拡げて、現代世代と将来世代との自立共生を考えたいのです。

本来、自立共生は、「今」という時間、「ここ」という場所（空間）を共有する人々の間で成立するものです。しかし、私たちは、この自立共生を現在地球に生きている人々の間だけでなく、将来地球に生まれてくる人々との関係にも拡大して考える必要があります。なぜなら現代世代は、自分たちの間においてだけではなく、将来の世代とも地球上の限られた資源を分かち合って生きていくことが求められるからです。

2 インド独立運動

ガンディーは、非暴力でインド独立運動を闘いました。この運動は、いわばインドとイギリスとの間において自立共生の関係を築こうとするものでした。しかし彼は、同時に国内の様々な問題にも目を向けていました。それらは、第一に、ヒンドゥーとムスリ

ムの対立、第二に、インドのカースト制度の外側に置かれた不可触民への差別、そして第三に、広範な貧困です。彼は、こうした宗派間、社会階層間、経済階級間の対立を乗り越えて、対内的な自立共生を人々の間に構築しようとしていました。

本日は、このうちに第三の問題に焦点を当てて、ガンディーが、「手紡ぎ・手織り」の事業を通じて、貧者をいかに救済しようとしていたかを考えたいと思います。

3 ガンディーの経済論

ガンディーの思想全般は、

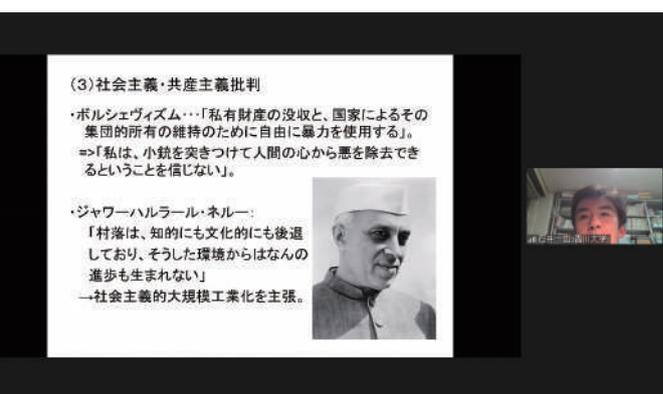
近代文明に対するゆるぎない批判的精神に支えられています。彼が見ていた近代は、当時イギリスが自国の工業のために世界経済を再編成していくという意味において、まさにイギリスを中心とするグローバル化の時代でした。ガンディーは、「インドを踏みにじっているのは、イギリス人の踵ではなく、近代文明のそれである」と言いました。私たちはここに、支配しているイギリス人を敵視しないという、彼の思想の特徴の一つを見いだすことができます。

当時の西欧諸国は、経済発展を進めるために、それ以外の国々を帝国主義的に支配していきました。これら諸国は、市場や資源を巡って世界を分割し、やがては世界戦争へ向かうプロセスを辿ります。そうした歴史をみていたガンディーは、「機械は近代文明の主たる象徴であって、大きな罪を代表している。……インドの手工業がまったく姿を消してしまったのは、マンチェスターのせいなのです」と言っています。したがって、彼はインドがヨー

ロッパと同様に工業化していくことには反対でした。彼のいう真の意味での文明とは、必要物の拡大ではなく、それを慎重にそして自発的に削減していくことだったのです。

ガンディーは、1921年に『ヤング・インディア』紙上で、「人は最も良い、最も安い市場で物を買うはずであるという、経済の法則は悪いことですか」の問いに、「それは近代の経済学者が示した格言の中で、最も非人間的なものの一つです」と答えています。

イギリスで始まった経済学の流れを18世紀の半ば頃から19世紀にかけて辿ると、自国



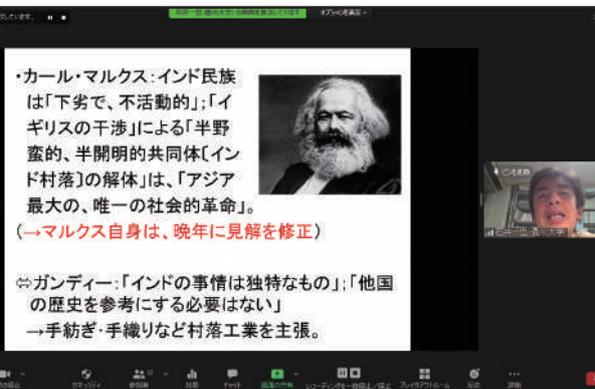
の持続的発展のために自由貿易を当初から推奨し、やがては、そこに植民地開発のための資本輸出論が加わります。

ガンディーは、「近代文明に酔っている人は、それに反対することは書かない」、「一國が他国を支配することを許す経済学は非道徳である」と述べています。経済学が、帝国主義を是認するように展開したのに対して、ガンディーの言説は、まさにそうした支配を受けた側からの異議申し立てだったのです。

ガンディーは、実は、もう一つの近代の思想体系であったマルクス主義に対しても同様に批判的でした。彼は、共産主義や社会主義が掲げる平等な社会という目標については是認していましたが、それを実現するために強制力を働かせることには反対でした。彼は、「小銃を突きつけて人間の心から悪を除去できるということを信じない」とはつきりと言いました。

4 チャルカー運動 「脱近代」の経済建設

こうした近代の思想体系と



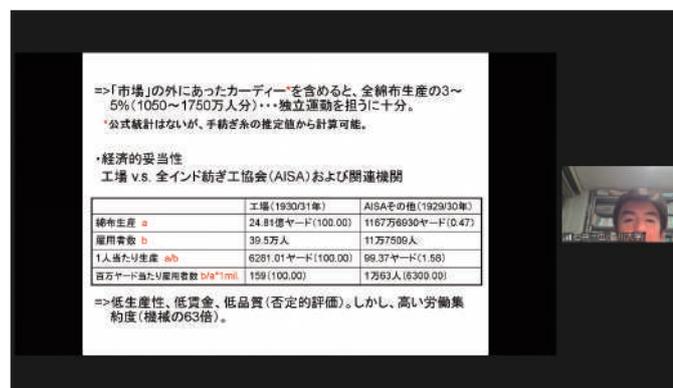
は異なり、ガンディーはインドの村々にかつて存在していたチャルカー(手紡ぎ車)を大々的に復活し、皆で糸を紡ぎ、それを手織り機にかけて自分たちの衣服を自分たちで作るという運動を展開しました。イギリスから政治的に独立するだけでなく、経済的にも自立するために、手紡ぎ・手織りを中心に行っていくという方針です。チャルカー運動は、彼にとつてはまさに「脱近代」の経済を建設しようとする試みでした。

このチャルカー運動は、カーディー(手織綿布)を作る工程を全て手作業にする

ことで労働の機会を広く分散し、貧者を救済しようとするもので、それを担ったのが全インド手紡ぎ工協会(AISA)です。この運動は、外国製綿布、なかでもイギリス製綿布を排除することに成功しましたが、すでに大きく成長していたインド人の資本家による工場製綿布との対抗関係の中で進展しました。

この運動に対する評価は大きく2つに分かれます。経済学者らは、市場の規模に注目し、カーディーの規模は極めて小さかったとみなしています。逆に文化人類学者は、カーディーの文化的インパクトは極めて大きかったと評価しています。

私は、市場の外にあったカーディーを含めて考えると、全綿布生産の3〜5パーセント、人口にして1050〜1750万人分の綿布が存在していたとみており、独立運動を担う人々の身体を包むのに十分な規模であったと考えています。それから、インドでも機械で布を作るような時代であったにも関わらず、手紡ぎ、手織りはそもそも経



済的に妥当であったかどうかという問題があります。1930年の時点で、工場生産量と雇用者数から1人当たり生産量を計算すると、AISAは工場の1・58%にしかありません。しかし、逆に言えば、チャルカーを使って皆で布を生産すれば、実に機械の63倍もの雇用が生まれることとなります。

ガンディーのチャルカーについては、独立運動のシンボルとしての意味ばかりが認識されてきましたが、私は、ここに大きな経済的意味があったと考えています。チャルカー運動は生産性が低く、賃

金も低く、品質も悪いと概ね否定的に評価されていました。が、実は非常に高い労働集約度や雇用吸収力を持っていた点にこそ、経済的妥当性を認めるべきであると考えるのです。

ガンディーは、カーディーがたとえ高価であったとしても、稼ぎのない親や子どもを養うことを恵みであると考え、のと同様に、紡ぎ工や織り工の生業を助けることを同胞に求めていました。安い外国産の野菜と少し高めのだ元の野菜のどちらを買うか、自分の落とす金が誰の生活を支えているかを考える上で、このガンディーのメッセージは、現在日本に生きる私たちにも示唆するものがあるように思います。

5 受託者制度理論

チャルカー運動が、ガンディー経済思想の一方の柱だとしますと、もう一方の柱が受託者制度理論です。これは、豊かな人たちは神からその財産の信託を受けた受託者として行動しなさいという教えです。彼はこの理論を通じ

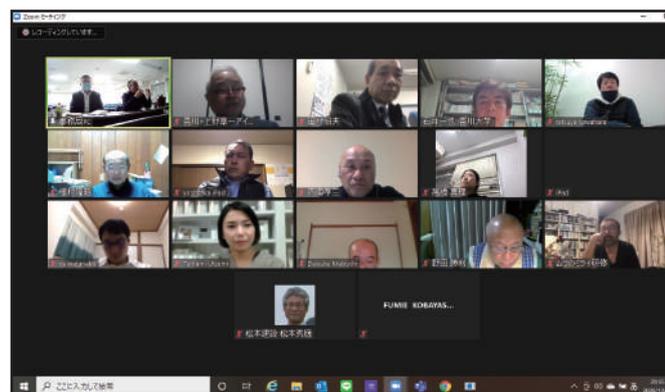
て、自分の財産は自分のものではなく、神から預かったものとみなして、それを貧者のために行使するように資本家や地主に呼びかけました。

この理論は、富者が受託者として振舞うかぎり、その社会的立場を是認するがゆえに、社会主義者や共産主義者から激しく批判されました。しかし、ガンディーには、この理論によって資本家から資金を引き出し、それをチャルカー運動に振り向けるという目的がありました。

こうして彼は、資本家階級の擁護よりもなお貧者の救済に力点を置き、階級間の対立を超えて自立共生的な関係性を築こうとしていたとみられます。もしそうだとすれば、この理論もまた、インド社会における内在的な矛盾、すなわち貧富の格差を非暴力的に解決しようとした社会改革論として前向きに評価することができますはずです。

6 理想の村落像

チャルカー運動と受託者制度理論を掲げて、結局のところガンディーが目指していた



のは、70万のインド村落の自立でした。彼は、人間の身の丈に合った自然の中での共同組合的な社会において、皆が助け合って生きてゆくことを理想としていました。

ガンディーは、そうした村落を中心としてインドを再建することによって他の世界と平和な関係を築くことを以下の言葉で表わしています。「独立インドが泣きうめく世界に対して、その役割を果たせるのは、その何千という田舎屋を発展させ、世界と平和を保ちつつ、簡素で気高い生活を採用することによってである」。

7 タゴールとセンによるガンディー批判

以上のようなガンディーの経済思想は、同時代の詩人、ラビンドラナート・タゴールによって激しく批判されました。ガンディーとタゴールは、互いに深く敬愛し合っていました。時折激しく論争しましたが、タゴールは、ガンディーの対英非協力運動を「地方気質の最悪の形式」とみなし、チャルカー運動を「知識と教養に鍵をかけること」として批判します。

後に、経済学者アマルティヤ・センが、「タゴールの側に立って」二人の論争を振り返り、「チャルカー批判をけっして止めなかつたタゴールが、その経済的判断においておそらく正しい」と評価します。センは、基本的にチャルカーを「インフレ的で資本蓄積にマイナスに影響」するものとみなしました。しかし、ガンディーの意図が、資本蓄積ではなく、身の丈の経済における人々の共生にあったとすれば、経済発展に寄与しないことをもってチャルカー運動を批判する

センの議論は、妥当ではないと私は考えます。

8 ガンディー思想の現代的意義 センによる批判を越えて

センは、「グローバル化の反対側に位置するのは、偏狭な分離主義や頑迷な経済自立主義」だと述べて、グローバル化を是認します。この立場は、ガンディーの運動を「地方気質の最悪の形式」と批判したタゴールのそれに近いものがあります。センは、実際、市場による経済的繁栄、利己心、資本蓄積、発展の本身としての「自由」など、グローバル化を支える諸価値を歓迎している点で、おおむね近代主義の枠組みの中で思考する論者であると考えられます。

貧者が「特権的な人々が享受している社会的・経済的機会から排除されている」というセンの発言には、「貧者にやさしい経済学者」という彼への評価につながる響きがあります。しかし、彼は、この時「特権的な人々が享受している社会的・経済的機会」の正統性を疑っておりま

せん。つまり、それが、貧者の「自由」を制限することによって獲得された機会である可能性が考慮されていないのです。この点は、センが、貧困を「絶対的剥奪」とみなし、「相対的剥奪」（搾取や不平等など）の文脈からそれを切り離して議論する姿勢とともに問題があるといえるでしょう。

これに対して、ガンディー思想は、チャルカーのように資源節約的・労働集約的な技術と簡素な社会を標榜し、貧困を絶対的文脈のみならず相対的文脈においても捉え、生態系の枠内で富の偏在

を非暴力的に是正しようとするものです。持続可能な社会のためには、貧者の「自由」の拡大において、特権的な人々が「必要物」を自発的に削減することが同時に求められるでしょう。だとすれば、人類がグローバル化の流れをより良い方向に転換する契機は、センではなく、やはりガンディーの思想に見出せると考えられます。

おわりに

21世紀は、グローバル化の名のもとに、ますます多くの人々が枯渇性資源をいっそう激しく奪い合うのか、それとも将来世代のことも考えて、より簡素な生活の中に満足を見いだすのかの選択を迫られる時代だと言えます（世代間の自立共生）。そして、世界の貧困の解消とともに、富者は「必要物」を削減することが求められるでしょう（世代内の自立共生）。いずれにしても、人類は、身の丈の経済に旋回する以外道はないのです。

この時、ガンディーの次の

言葉は、今に生きる私たちに、きわめて深長な意味をもつものです。「地球は、全ての人々の必要を満たすのに十分なものを提供するが、全ての人の食欲を満たすほどのものは提供しない」。

スミスからセンにいたる経済学は、おおむね成長経済において人々を養う方策を考えてきました。これに対して、ガンディー思想に基づく新しい経済学は、縮小経済においてこの課題に取り組もうとするものです。しかし、その課題は、これまで成長経済を支えてきた利己心、資本蓄積、市場メカニズム、国家主導の開発など、「一連の「近代」の諸価値の対極に向かいながら、同時に「近代」において未曾有の規模に増大した地球人口を養うという困難な作業を意味するのです。

※紙面の都合で講演内容の一部を割愛させていただきました。